

魅惑の色

森野 水琴

東京に家庭電灯が普及したのは明治時代のことらしい。
戦後に雪国で生まれた彼は、高校卒業後、隣県に就職した。
週末、実家に帰ってみると、街灯の少なさで夜道が歩きにくかった。
月明りと懐中電灯でかろうじて歩いた。心細い限りである。
室内の照明も会社と比べると、かなり薄暗い感じがした。
だが薄暗さのおかげで、白色や金色が映えるらしい。
黒と白、黒と金の対比である。

黒板に白墨で書くのも白を映えさせる。

一方、白紙に墨で毛筆すると黒が主役になる。

最近、彼は空き地の草に注目している。

日差しを浴びる緑もさることながら、隣家の影に緑が深みを増す。

眺めているうちに 夜の とばりが降りて 黒く染めていく